

3月1日(日)

市民参画型教育講演(第2会場)

9:00~10:00

薬物治療効果の構造的理解: プラセボ反応と「やわらかな1.5人称」による

コミュニケーションの臨床的意義

演者 中野 重行(大分大学 名誉教授)

座長 上村 尚人(大分大学医学部 臨床薬理学講座)

市民参画型シンポジウム(第2会場)

10:15-11:45

「薬が増えて不安なあなたへ～専門医と考える、高齢期の上手な薬との付き合い方～」

座長 中島 創(中津胃腸病院 訪問診療センター)

上村 尚人(大分大学医学部 臨床薬理学講座)

症例提示

モデレーター 徳重 明央(琉球大学大学院 医学研究科 臨床薬理学講座)

コメンテーター 吉原 一文(九州大学 キャンパスライフ健康支援センター)

吉里 恒昭(河村クリニック)

龍田 涼佑(大分大学医学部附属病院 薬剤部)

閉 会

11:45

## 薬物治療効果の構造的理解：プラセボ反応と「やわらかな1.5人称」によるコミュニケーションの臨床的意義

中野 重行

大分大学 名誉教授、臨床試験支援財団 理事長

現代医療において、「薬」は治療に欠かせない存在です。しかし治療効果は、薬の化学的成分（D：Drug）だけで決まるものではありません。そこには、治療を受ける安心感や期待から生じる「プラセボ反応（P：Placebo reaction）」、そして人間が本来備えている「自然治癒力や症状の自然変動（N：Natural healing power/fluctuation）」が深く関与しています。すなわち治療効果とは、D・P・Nの三要素が重なり合った「構造」として立体的に理解されるべきものです。

プラセボ反応は単なる「思い込み」ではなく、脳科学的にも裏付けられた、再現可能な「治療資源」と考えられます。このPとNの力を引き出し、薬の効果を支える鍵となるのが、演者が提唱してきた「やわらかな1.5人称」によるコミュニケーションです。これは、医療者としての1人称（客観的・理性的）を保ちながら、患者の2人称（主観的・感性的）にも寄り添い、その間を柔軟に行き来する姿勢を指します。

この視点に基づく関わりはPを高めるとともに、生活のバランスとリズムを整えることでNの力を支えます。その結果、薬物治療の効果が高まり、薬の減量や離脱が可能となる場合もあります。症状の一時的な揺らぎ（Nの特徴のひとつ）を治療の失敗/不完全と即断して直ぐ薬を増やすのではなく、生体の「治る力（P+N）」を信頼して見守る姿勢は、ポリファーマシー防止にもつながります。本講演では、演者自身の半世紀を超える臨床薬理学・心身医学の経験をもとに、薬に頼りすぎない「質の高い医療」と、回復を促す「コミュニケーションの力」について、市民の皆様にもわかりやすく解説します。

## 薬が増えて不安なあなたへ ～専門医と考える、高齢期の上手な薬との付き合い方～

徳重 明央

琉球大学大学院 医学研究科 臨床薬理学講座 准教授

「薬の数が増えて心配だ」「飲み合わせは大丈夫か」と不安を感じたことはありませんか？複数の病気を抱えると、治療に必要な薬が積み重なり、気づけば多くの薬を服用していることがあります。これを「ポリファーマシー」と呼び、日本では6種類以上の服用で、ふらつきや転倒、物忘れなどの副作用が出やすくなることが知られています。

しかし、薬を減らすことだけが正解ではありません。心臓病などの治療では、ガイドラインに基づいた「適切な多剤併用」が、心筋梗塞や脳卒中を防ぐための大切な盾となるからです。大切なのは、数だけを気にするのではなく、その薬が今のあなたにとって本当に「適切」かどうかを見極めることです。

本講演では、私が離島などで取り組んでいた「薬剤調整ラウンド」の事例を紹介します。これは医師、薬剤師、看護師がチームとなり、患者さんの生活環境や認知機能に合わせて、薬の優先順位を整理する活動です。実際に、副作用の原因となっていた薬を整理することで、食欲が戻り元気に歩けるようになった方もいらっしゃいます。

薬を安全に使い続けるためには、患者さんご自身が「何のための薬か」を理解し、気になる症状を医師や薬剤師に相談する勇気が第一歩です。長年、臨床薬理と循環器診療に携わってきた専門医の視点から、皆さんが健やかな毎日を送るための「賢い処方箋」の見つけ方を分かりやすくお伝えします。自己判断で中断せず、まずは専門家と一緒に、あなたに最適な薬の形を考えていきましょう。